

第2章 京都大学病院構内A I 15区の発掘調査

富井 眞 内記 理

1 調査の概要

本調査区は京都大学病院西構内の北に接する薬学部構内の東南隅に位置する（図版1-427）。現在の行政区分では吉田下阿達町に所在するが、登録遺跡名では聖護院川原町遺跡に含まれる。ここに、薬学総合研究棟の新設が計画されたために、発掘調査を2014年6月2日～9月12日に実施した。調査面積は、2191㎡である。

近接地点での既往の調査によれば、中世には本調査区周辺は、北東50m前後に位置する366地点で東岸が検出されている南流する高野川系の流路にあたり、南西150m前後に位置する349地点ではその高野川系の流路が中世前半期から中世末期にかけて徐々に西へと移行していくことが確認されている。したがって先史時代～古代に関しては、遺構も包含層も残存せず、遺物は、中世までの厚い高野川系の砂礫層かその後の包含層や遺構埋土からの出土に限られる。中世末期ごろからは、南方70m前後に位置する384地点では、活動痕跡が見られようになり、西北西にやや急に傾斜する斜面際に、16世紀にさかのぼりえる集石や溝・道が検出されている。そして、西南西100m前後に位置する379・398地点では、17世紀前半には南の聖護院村との境界に東西方向の道がはしり17世紀後半にはそれに沿った用水路も構築され、この一帯は幕末に練兵場になるまでおよそ安定的に田畑が営まれたことがわかっている。

また、本調査区内については、2012年度の立合調査によって、近代の厚い盛り土の下位に、近世の遺物包含層と思われる2枚の地層（灰褐色土と淡褐色土）の存在が確認されていた。しかし、それ以深は鴨川の自然堆積層が分布していたので、周辺と同様に、中世にさかのぼる地層はほとんど残存していないものと想定された。

発掘調査の結果、近代の盛り土の下で、江戸時代後半の畑境の段差や石垣や区画溝、井戸や杭列などを検出した。中世以前については、遺物包含層は残存せず、遺構は遺物量の乏しい平行溝群を確認したにとどまるが、江戸時代の包含層や遺構埋土からは高頻度で土師器の破片が出土するほか、下位の鴨川の自然堆積層の中でも上部には遺物が散見できる。出土遺物は整理箱で23箱にとどまり、大半が江戸時代の陶磁器である。

2 層 位

本調査区は、旧・京都織物会社の敷地にあたり、昭和33年（1958）に京都大学が購入した。発掘前には、薬学部構内で薬草園として使用されていたこともあって既存の建物はなく、わずかに西へ下がるもののおよそ平坦な地形だった。現地表の標高は47～48mで、基本層序は、表土（第1層）、灰褐色土Ⅱ（第4層）、淡褐色土・黄灰褐色土（第6・6'層）、緑灰色細砂質土（第8層）、砂礫（第9層）である（図2）。第6・6'層の上面と第9層の上面で遺構検出をおこなった（図版2・3，図3～5）。

表土（第1層）は、機械掘削により除去した。主として2012年度の立合調査で確認していた近現代の盛り土で、調査区全体に1m以上の厚みで分布している。調査区西南辺には、さらに深く攪乱が入っていた。第1層から出土した近現代の人工物の中には、「京都織物會社」銘のある陶器もある。

表土の下には、主として灰褐色を呈する粘質土が広がり、調査区中央では、南北方向にはしる石列を含む集石を確認した。石列を境にして、西側の灰褐色土には、やや砂質になる明茶褐色土（第3層）が介在するので、明茶褐色土より上位の灰褐色土を灰褐色土Ⅰ（第2層）、下位の灰褐色土を灰褐色土Ⅱ（第4層）とし、便宜的に区分した。東側の灰褐色土は安定的に厚さ20cm前後を保っており、明茶褐色土を介在しないので、便宜的に灰褐色土Ⅱとした。西半での灰褐色土Ⅱの厚さは10cm前後である。なお、表土下で確認した石列は、第3層までの掘削によって、西に面を向けて花崗岩などを据えた石垣（SW1）の基底部であることが判明した。

灰褐色土はガラス破片を含むので、灰褐色土Ⅰと明茶褐色土は機械掘削をしたが、灰褐色土Ⅱは人力で掘削した。灰褐色土Ⅱは、ガラス破片を含む江戸時代から明治にかけての粘質土で、50mm程度の大きさまでの堆積岩を主とする礫を含む。石垣の東西で、出土遺物に時期差はうかがえないが、西側では東側よりも、炭化物が少なめで礫が多めに含まれる傾向がある。出土遺物には大きな破片はあまりない。江戸時代の陶磁器や土師器が主体的で瓦は少なく、磁器染付では濃青色の釉で染色体のような意匠を描くものも数多く出土した。明治20年（1887）に旧・京都織物会社の敷地になるころまでの地層と判断している。

灰褐色土Ⅱの下位には、石垣の東側では淡褐色土（第6層）、西側では黄灰褐色土（第6'層）が分布するが、石垣のすぐ東側では、石垣に沿ってわずかに暗褐色土（第5層）が分布する。暗褐色土は、粗砂質で、上位の灰褐色土Ⅱや下位の淡褐色土と比べると、含

層位

〔東西畔〕

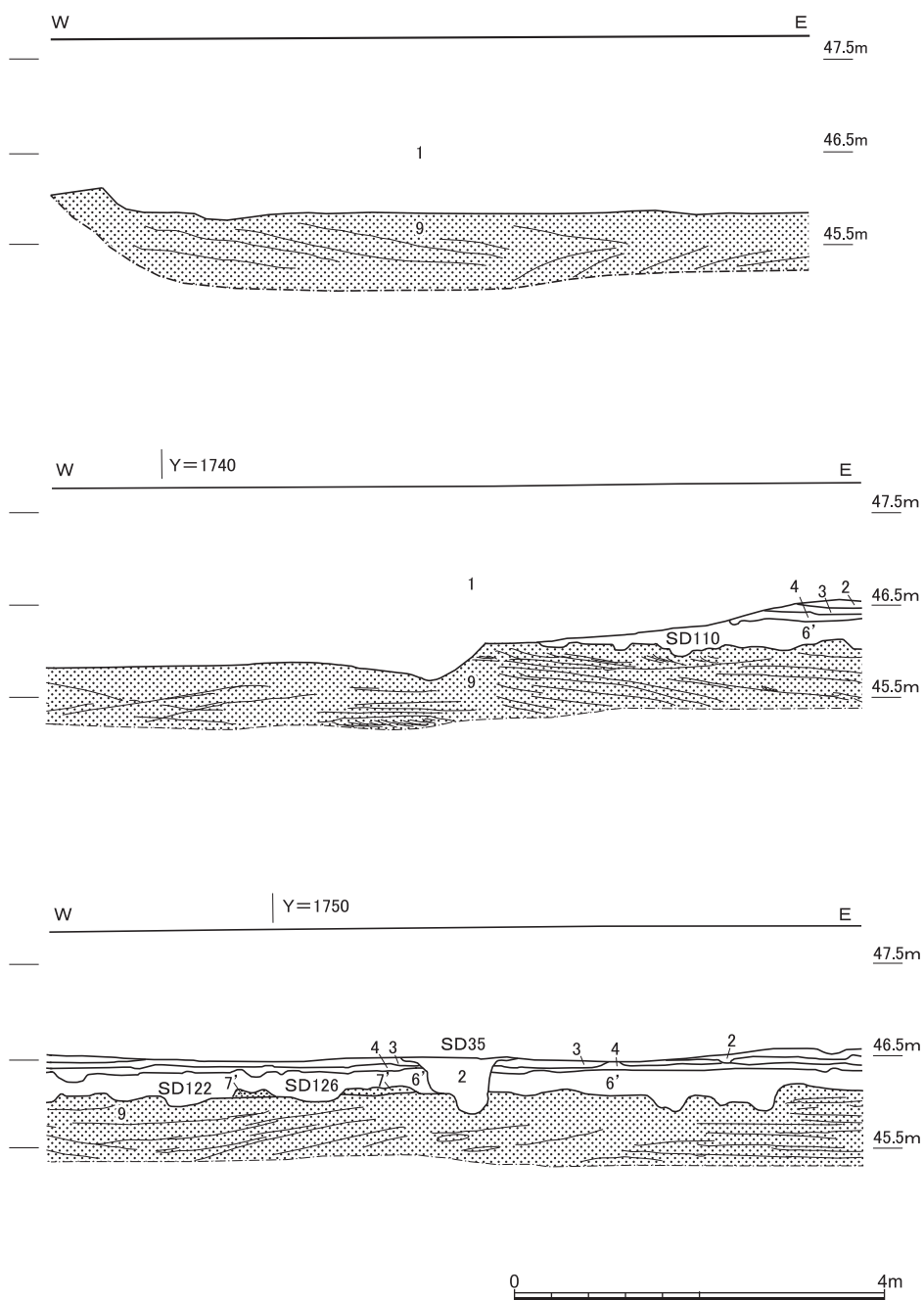


図2 層位 縮尺1/80

京都大学病院構内A I 15区の発掘調査

〔東西畔〕 つづき

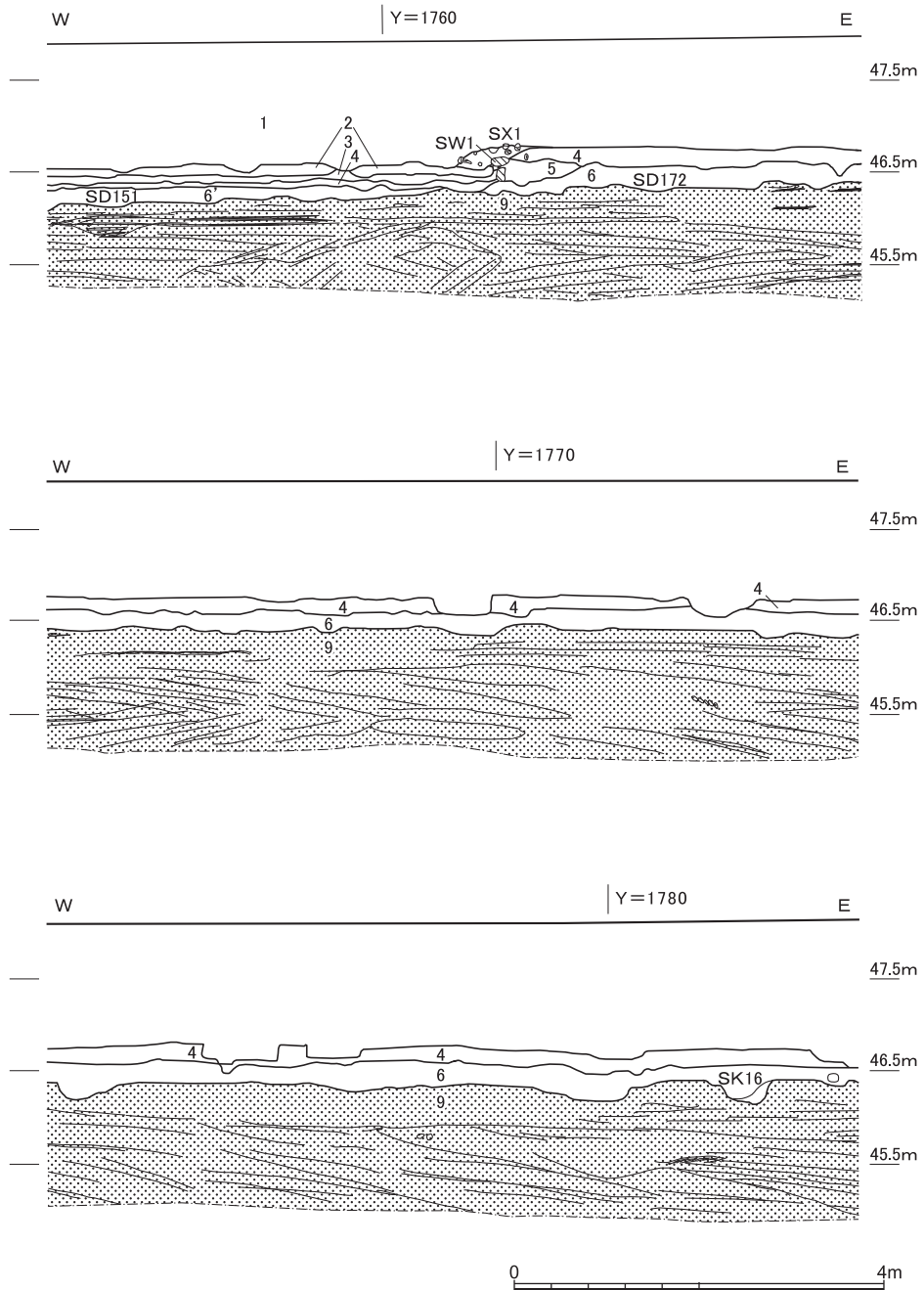
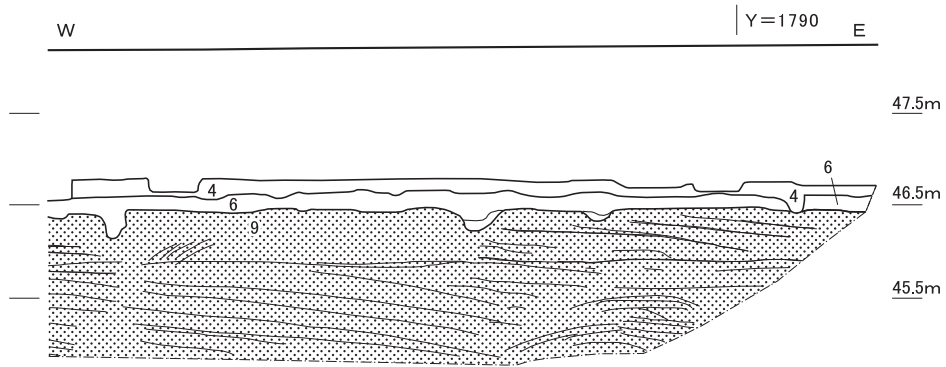


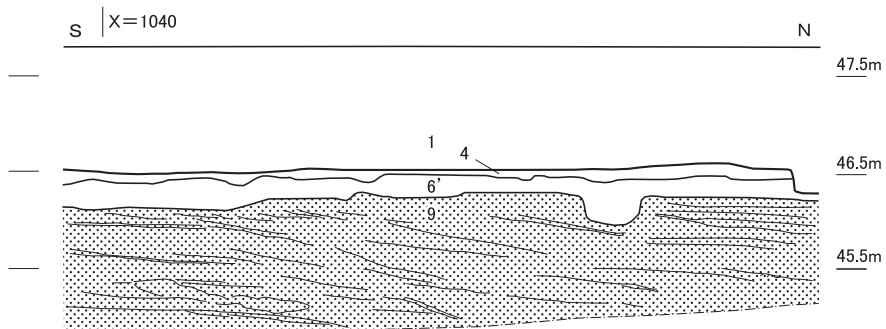
図2 つづき

層 位

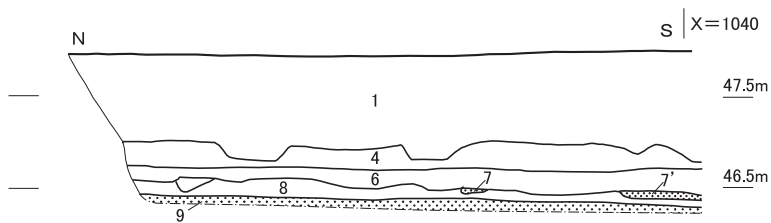
〔東西畔〕 つづき



〔西壁北辺〕



〔東壁北辺〕



- | | | | |
|---------|---------|----------|-----------|
| 1 表土・攪乱 | 4 灰褐色土Ⅱ | 6' 黄灰褐色土 | 8 緑灰色細砂質土 |
| 2 灰褐色土Ⅰ | 5 暗褐色土 | 7 緑灰色粗砂 | 9 砂 礫 |
| 3 明茶褐色土 | 6 淡褐色土 | 7' 緑灰色細砂 | |

0 4m

図2 つづき

まれる礫が小さく量も少ない。石垣との関係から、第3層より古い堆積と判断する。調査区東半の灰褐色土Ⅱの堆積中の比較的早い時点で、石垣を構築する際に、裏込めのような機能を意図して持ち込まれた可能性もある。

淡褐色土は、シルト質～細砂質で、東半の中央付近はやや砂質に富む。50mm程度の大きさまでの礫を、灰褐色土Ⅱよりも多く含む。10mm以上の礫はほとんどが堆積岩である。黄灰褐色土も同様だが、淡褐色土よりも細砂質で土質に欠ける。淡褐色土と黄灰褐色土は、出土遺物に時期差はうかがえないので、基質の粒径に対応した土壌化の程度差が色調に表れたと思われる。出土遺物は、灰褐色土よりも多く、また大ぶりの破片も散見できる。残存率の高い17世紀の土師器鍋が土坑から出土しているほか、染付碗には端反り口縁のものや広東碗を含まないので、17～18世紀の年代に収まると判断している。

調査区東北辺には、淡褐色土の下位に、緑灰色細砂質土（第8層）が分布する。上部には、より土質に欠ける緑灰色の粗砂（第7層）や細砂（第7'層）が介在する場合もあるが、面的には把握しづらく層厚も薄いので、自然堆積を保っているかは不明である。緑灰色細砂質土は、分布域が南北溝S D179以東と東西溝S D178以北に限られ（図4）、遺物をあまり含まない。瀬戸美濃系と思われる17世紀の天目碗や、見込みに太めの圈線をもつ土師器皿などの破片が出土したので、江戸時代前期までの堆積と判断する。

砂礫（第9層）は、花崗岩や堆積岩の砂粒を基質とする砂礫層が主体的な、粗砂や砂礫で構成される自然堆積層で、総じて、上部ほど礫が小さく砂質になる。第9層は、東西畔では、淡褐色土・黄灰褐色土の下場から50cm程度までは、ほぼ水平に堆積する層厚5cmほどの細砂層を複数認められるが、およそ粗砂基質で50mm程度までの堆積岩を主体とする砂礫が堆積する。近世の遺物は認められない。それより下位は、200mm程度の堆積岩を含む砂礫層で、上流の中世の陸域を浸食した痕跡と思われる褐色を呈する粘質土の偽礫も確認できる。淡褐色土の下場より50cm以上深い部分でもE類の土師器破片を含む。調査区中央の断ち割りでは（図3）、東のトレンチの第9層中に、北東－南西の流向と思われる幅7mほどで深さ0.7m以上の流路を確認でき、その最下部でも200mm大の堆積岩の直下のシルト層から中世の土師器片を回収している。調査区西壁北辺の断ち割りでは、100mm程度までの堆積岩を主体とする砂礫層が、北壁は西下がり、西壁は北下がり、に堆積しているのを確認した。そして、50mm大までの粒径しか含まない最上部からは、17世紀の土師器鍋の胴部と思われる破片が出土している。南西方向への強い流れが、近世初頭までに南東から北西へと移行していったと思われる。

3 遺 構

(1) 中世の遺構（図版3-1，図3）

調査区の中央北辺では、淡褐色土除去後の砂礫上面で、北東から南西方向に並行してはしる幅約20cmほどの溝4条を検出した。埋土は、砂礫を多く含む淡黄灰色の砂質土で、横断面に立ち割りを入れたが水成堆積を確認できなかった。遺物は、F類の土師器細片がわずかに出土した以外には見当たらなかったため、中世末期の遺構と思われる。西辺にも同様の溝がある（SD97）。東北辺の落ち込みは、自然のものかもしれず性格は不明瞭。

(2) 近世の遺構（図版2・3，図4～6）

緑灰色細砂質土を埋土とする遺構は、不整形の浅い落ち込みSK17・18を検出したが、遺物は出土していない。それより上位の面では、遺構の埋土に対応させて、便宜的に、淡褐色土・黄灰褐色土を埋土にするものを近世1期（図版2-2，図4）、灰褐色土Ⅱを埋土にするものを近世2期とする（図版2-1，図5）。近世1期はおおよそ17～18世紀、近世2期はそれ以降の19世紀後半にかけての年代を想定している。

a. 近世1期の遺構（図4）

段差状緩傾斜 調査区中央南半のY=1758辺りで西落ちの段差状緩傾斜を検出した。斜面の上場は南北溝の東の立ち上がりとはほぼ一致する。東西の比高差は検出面からで約10cmをはかり、調査区全体で東半と西半とでは20cm程度の比高差となる。

溝 緩傾斜の段差の西側では東に約3°振れて並行する溝群を検出している。段差付近では、重なり合いながら密集してはしり、またそれと直交する溝も確認できる。西辺では、数m間隔で検出できるほどで重なり合うものも少なく、東西方向の溝もほとんど認められない。深さは10cm前後のものが多く、いずれも鋤溝と思われる。

東半では、東南辺には、集石をとまう幅1m程度で深さ20cm前後の溝SD178のほかには、東西方向の溝はほとんど認められない。SD178は、東に約1°振れている。鋤溝より幅が広く集石SX2を内包することに加え、その南側には緑灰色細砂質土が分布しないことから、南北を区画する地境と判断する。SD178以北では、西半の溝群とおおよそ平行する2条の南北溝SD182・186はともに鋤溝と思われるが、軸を異にするSD179は、緑灰色細砂質土の分布の西縁となっているので、土地を小規模に区画する機能があったと思われる。北壁近くでは西に1～2°振れた東西溝が数条はしる。いずれも鋤溝だろう。

井 戸 西辺中央で木組みの井戸SE1を検出した（図版3-2，図6）。石組み

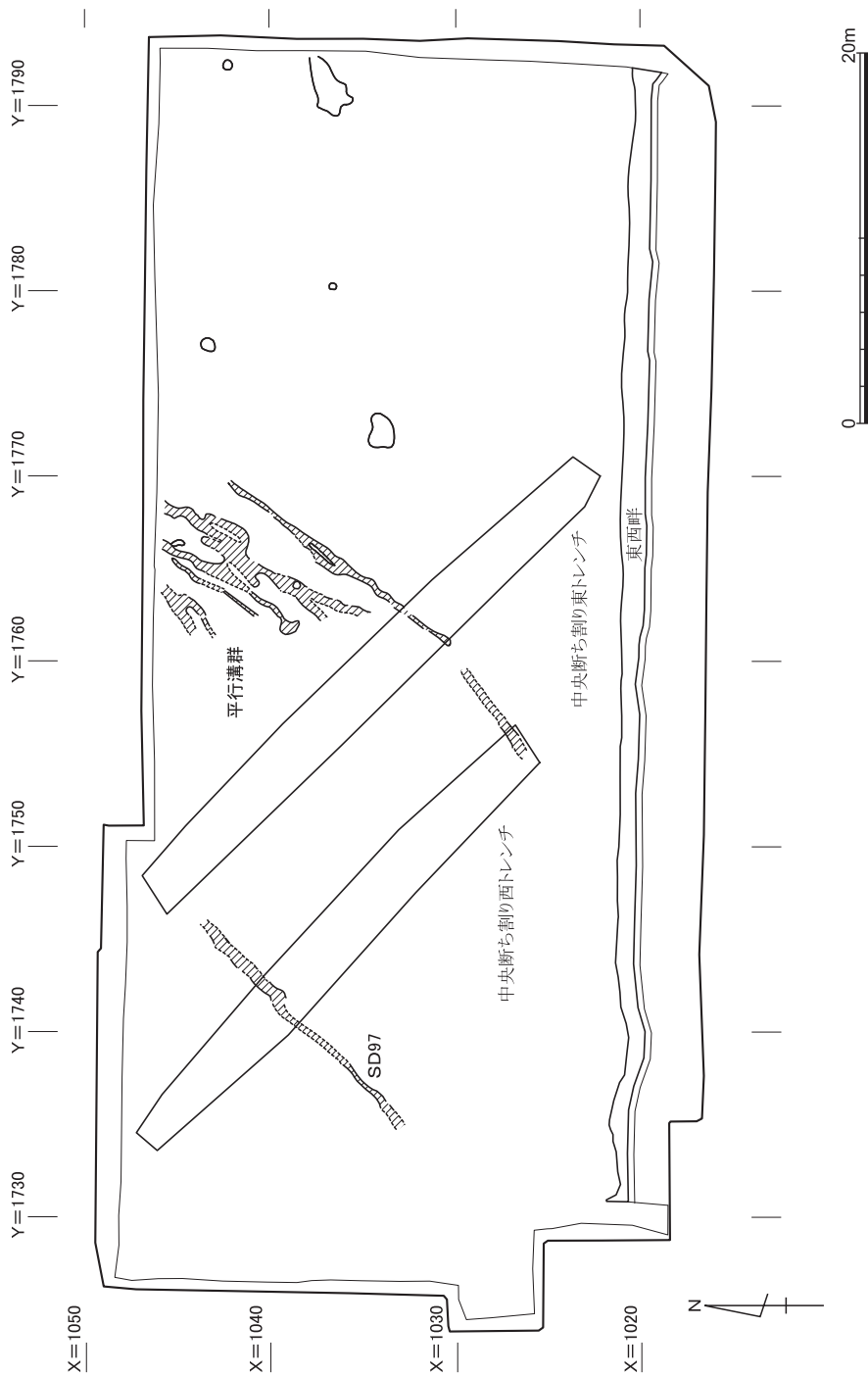


図3 中世末期の遺構 縮尺1/400

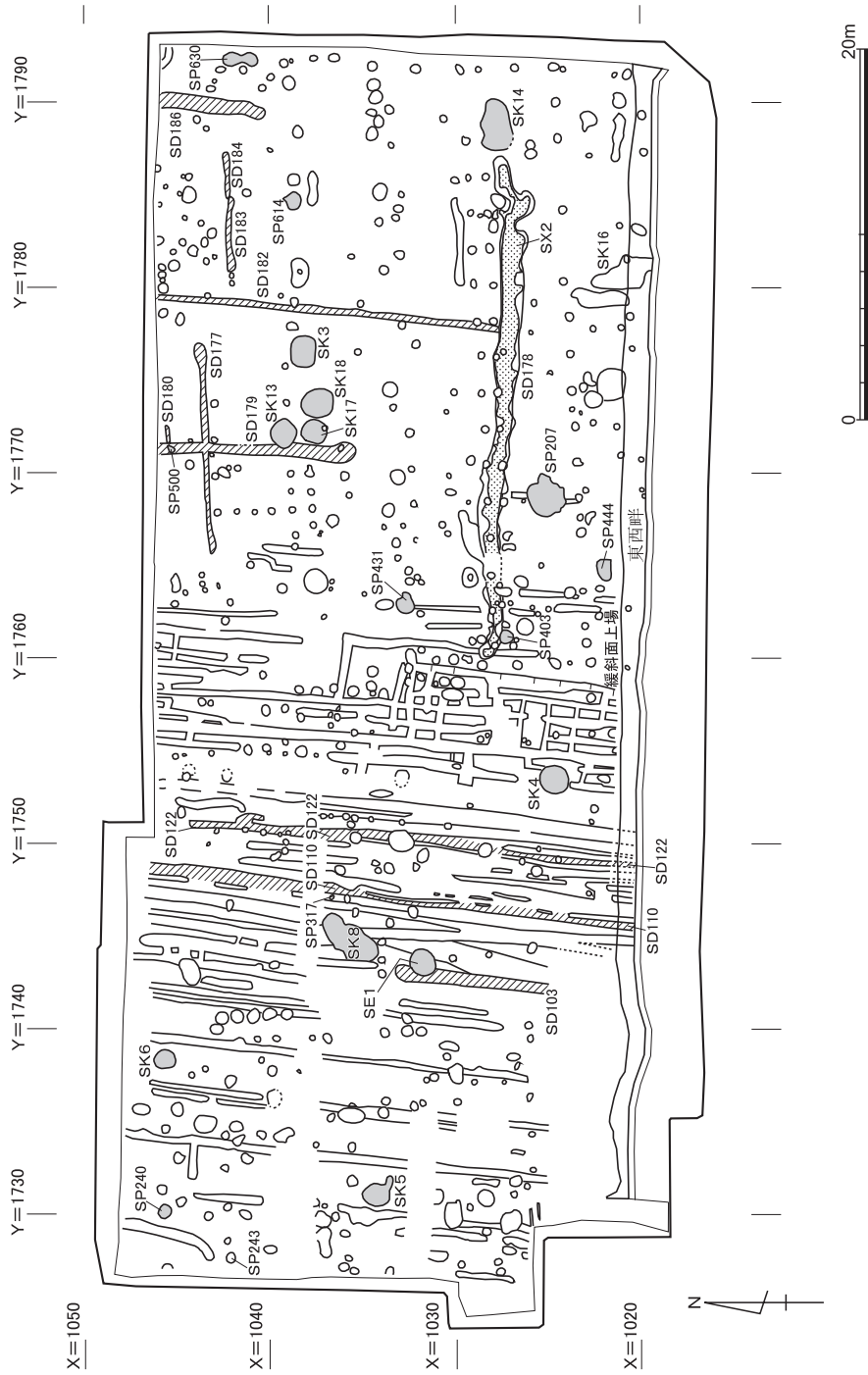


図 4 近世1期の遺構 縮尺1/400



図5 近世2期の遺構 縮尺1/400

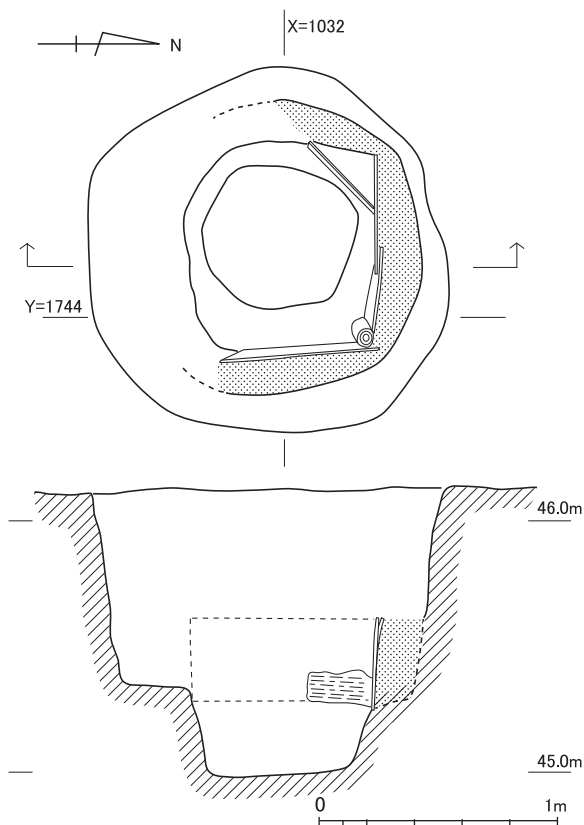


図6 井戸SE1 縮尺1/30

があったかは不明だが、埋土からは、拳大の礫は多数出土したものの、石組みに用いるような人頭大の石はほとんど出土していない。検出面から50cm前後掘り下げると、隅に表面の黒化した丸杭を備えた横組み1段の木枠を検出した。横板は、南半を欠き、西面の板は北隅から東側にずれ込み北面は板が裂けているなど、残存状態はよくないが、木質自体の遺存状態は杭も横板も比較的よい。井戸底の標高は44.9m。

集石 おもに拳大の堆積岩が溝や小ぶりの土坑に集積されているのを、調査区東半で確認した。SX2は溝SD178の中央に礫が充填されている、幅1m未満で長さ20m程度の集石（図版3-

3）。検出面では溝の立ち上がりから内側に向かって10cm前後までは礫がほとんど出土しない。そのほかの集石は、径50cm前後の浅い凹みをともなったもので、SP614・630は調査区東北辺で、SP431は中央付近で、それぞれ検出した。

土坑 溝SD178の東端のすぐ東で、陶磁器がややまとまって包含されている土坑SK14を検出した（図版3-4）。長軸2mほどの不整形。また、中央南辺では、直径1.7m前後の円形で深さ80cm程度の土坑SK4を検出した。埋土の中央は人頭大の礫を多く含む円柱状に堆積している粘質土が認められ、標高45.4mの底面中央にはその粘質土が礫を含まずに薄く残存したことから、石組みの井戸が廃絶したものと思われる。同じく中央南辺では、鉄釘の破片が比較的多く出土したSP207がある。木桶を用いた井戸だったかもしれない。これらの土坑と同様の法量のものが、SK5・6などほかにも点在するが、木質が残存していないので、井戸の掘削を試みた跡や野壺だったのかはわからない。

このほか、S P 403は中央付近で検出した浅い土坑で、瓦器の底部半分が正位で出土した。S P 444は中央南辺に位置する浅い土坑で、大型の破片を含む土師器鍋が逆位外面上向きで出土した。S P 500は中央北辺で検出した浅い土坑で、完形の土師器が出土した。

ピット群 緩傾斜の段差の西側では、鋤溝と並行して列をなす群を、段差付近を中心に数条認められる。東西方向に並ぶ群も西南辺や西北辺にあるが、それらは軸が西に1～2°振れているので、南北溝と並行するものとは時期差があるかもしれない。

段差の東側では、西に約2°振れた東西方向に並ぶ群があり、その中には、S D 177・183等に平行するものや、集石S X 2を切るものも認められる。これらの群は、調査区西辺のものと軸がおおよそ平行するので、両群が同時期に存在した可能性がある。

b. 近世2期の遺構（図5）

調査区の東半では、20cm前後の四辺形や円形の小ピットを多数検出した。深さはおおよそ10～20cm程度に収まる。おおよそ、0.9～1.3mの間隔をとりながら東に約1°振れて東西方向にはしる列が4m前後の間隔をもって並行していると思われるが、ピット列を個々にそれぞれうまく抽出できるわけではない。建物跡ではなく天日干しなどの農作業にかかわる杭列と思われる。西半では、小ピットは少なく、検出面からの深さが10cm程度の鋤溝を主に西北辺で検出した。東半のピット列と方位をおおよそ同じくする東西溝とそれに直交する南北溝で構成される。以下に、主な遺構を詳述する。

石 垣 調査区中央を東に3～4°振れて南北にはしる石垣S W 1を検出した（図版3－5）。灰褐色土Ⅱが堆積しはじめてから早い段階で、それまでの緩傾斜での段差が石垣による段差へと変貌したと思われる。調査区北辺では、削平を受けているが基底の石は断続的に並んで調査区北方へと続く。石垣の上面には、灰褐色土Ⅰの層中の集石と判断できる、5cm程度までの堆積岩を主体とする粗砂混じりの集石（S X 1）が幅1m程度で広がっていたので、石垣は基底部近くのみが残存していたというよりも、もともとあまり高くなかったと思われる。最下段は、30cm四方程度の大きさまでの整形された花崗岩を主体とし、2.8m程度の間隔で、等脚台形の花崗岩や縦位に据えた堆積岩が配置されているので、それが一つの単位をなしていると判断している。花崗岩の上部や隙間には、様々な大きさの堆積岩をはめ込むように配して、石垣の安定を心がけていることがわかる。

溝 上記のように多くの鋤溝が主に西北辺に分布しているが、石垣S W 1の9m西では、石垣に並行して東に約4°振れて深さ50cm以上をはかる溝S D 35を検出している（図版3－6）。東側の立ち上がりが急勾配なのに対して西側の立ち上がりが緩く、また、東

遺 物

側が深く西側にはテラス状の段をもつので、深い溝と浅い溝の2条の溝が重複していると思われる。しかし、東西畔の断面観察では、最終段階には灰褐色土Ⅰから掘り込まれていることを確認できるけれども、溝の埋土の掘削時には分層はかなわなかった。また、溝内のテラス状の部分の東縁には、深い柱穴が溝に並行して南北方向に1.6～2.0mの間隔で並ぶ（柱穴列SA1）。立ち上がりが急で深い溝とSA1とが同時に機能し、立ち上がりがなだらかで浅い溝と後述する柱穴列SA2とが同時に機能した、と思われるが、その組合せの先後関係は不明である。

柱 穴 列 南北溝SD35の西の立ち上がりのすぐ西側には、一辺25cm前後の方形で深さ50cm以上なることもある柱穴が、1.8m間隔で南北方向にはしる（SA2）。また、調査区東北辺で東に約3°振れて東西方向にはしる、一辺25cm前後で深さが30cm前後に達する方形のピットが2.6～2.8m間隔で並ぶ（SA3）。SA3は、石垣と方位がおおよそ直交するが、SA3の南側にも北側にも並行する柱穴列はないので、一列だけで機能していたことがわかる。また、SA3の最西のピットと石垣SW1との間隔が3m程なので、SA3は、石垣とかかわりをもってその東側を南北に区画する機能をもっていたと考えられる。

4 遺 物

本調査区において、整理箱23箱分の遺物が出土した。以下に出土遺物を、時代ごとに解説する。

(1) 中世以前の遺物

本調査区において、中世以前にさかのぼる遺構はほとんど確認されなかった。中世以前のものと考えられる遺物は、砂礫層と近世の包含層や遺構からみつかったが、いずれも摩滅した細片である。

先史の石器（Ⅰ1） Ⅰ1は先史時代のサヌカイト製の石器である。最大長5.4cm、幅3.6cm、厚さ0.7cmをはかる。使用された時代と使用用途は不明であるが、図中で下に向けた辺へ向けた打ち欠きが目立っており、この部位が石器の刃部にあたると判断した。

古代の土器（Ⅰ2～Ⅰ20） Ⅰ2～Ⅰ4は土師器である。Ⅰ2には幅12mmの凸帯がつく。器種は不明である。にぶい橙色を呈し、胎土には4mm以下の砂粒が含まれる。Ⅰ3は土師器の甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。内面の頸部より下には、左上から右下にはしる刷毛目と、その下に左右にはしる刷毛目がみられる。橙色を呈する。胎土は粗く、4mm以下の砂粒を含む。Ⅰ4は土師器の皿である。口縁部は「て」字状に屈曲する。

B₁類の皿である。にぶい橙色を呈する。1 mm以下の砂粒を含むが、砂粒の量は少ない。

I 5・I 6は緑釉陶器である。ともに底部で、摩滅が著しい。I 5には高台がつく。内面と外面に濃緑色の釉がかかるが、高台より内側には釉がかけられなかったようである。胎土の色調は浅黄橙で、砂粒は含まず精良である。I 6は破片であるが、皿の底部と考えられる。見込みに植物紋が浮彫される。内面と外面に緑釉が施される。

I 7～I 20は須恵器である。I 7は長頸壺の口縁と思われる。口縁部内面が突き出ており、断面が三角形状を呈している。外面には沈線のほか、右上から左下への斜め方向の調整痕跡がみられる。色調は灰色で、胎土には1 mm以下の砂粒が含まれる。I 8・I 9は杯の蓋である。I 8は口縁端部が下方に屈曲する。青灰色を呈する。I 9の内面には、口縁端部から下方にのびるかえりがつく。灰色を呈する。TK209型式のものと考えられ、飛鳥時代のものである。I 10・I 11は杯の口縁部である。I 11の口縁端部はわずかに外側に反る。青灰色を呈する。I 12は高台をもつ杯Bの底部である。高台は低く、高さ2 mmほどである。1 mm以下の砂粒を少量含み、灰白色を呈する。I 13・I 14は高台をもたない杯Aの底部と考えられる。両者ともに灰色を呈する。I 13の見込みは隆起が激しい。I 15・I 16は小型壺の底部と考えられる。底面には糸切り痕が残る。灰色を呈する。I 17は壺の底部と考えられる。外面の隆起が激しい。灰色を呈する。底部の調整が独特である。I 18は甕の底部と考えられる。内面には青海波紋の当て具痕が残る、外側は全面に横方向の刷毛目と縦方向の調整痕がみられる。紫灰色を呈する。I 19は壺の口縁部と考えられる。口縁端部が外面に向けて突出し、断面が三角形状を呈する。色調は灰色である。I 20は瓶の底部である。高さ6 mmほどの高台がつく。灰色を呈する。

中世の遺物 (I 21～I 24) I 21・I 22は青磁の碗である。I 21の高台部分には釉がかからない。I 23は中世の平瓦である。凸面には×字状のヘラ記号が施される。I 24は中世の軒平瓦である。瓦当の紋様は、2/3以上が破損してしまっているためわからない。わずかに残された部分からは、唐草文が描かれていたのではないかと推察される。凹面には布目の痕跡がわずかに残る。また、凸面には粘土板に瓦当の粘土を貼りつけた際に残された指圧痕が並ぶ。

(2) 近世初頭の遺物

調査区の東半の狭い範囲 (Y = 1772 (近世南北溝 S D 179) 以東で X = 1027 (近世東西溝 S D 178) 以北) において、淡褐色土の掘削後に砂礫層の上で砂礫を多く含む遺物包含層である緑灰色細砂質土層が確認された。緑灰色細砂質土層からは天目碗や見込みに圈線

遺 物

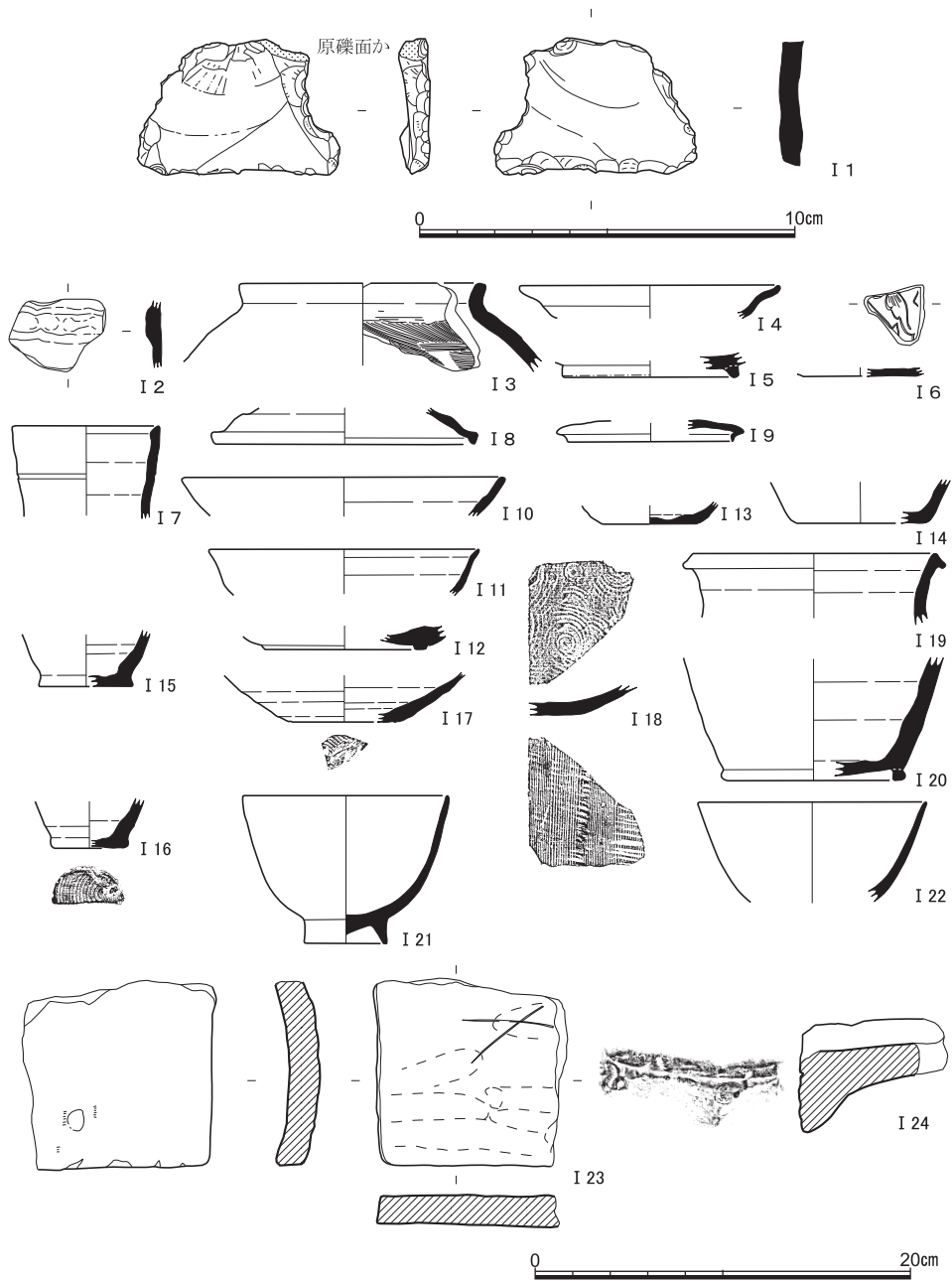


図7 中世以前の遺物 (I 1 先史石器, I 2～I 4 土師器, I 5・I 6 緑釉陶器, I 7～I 20 須恵器, I 21・I 22 青磁, I 23・I 24 瓦) I 1 縮尺1/2

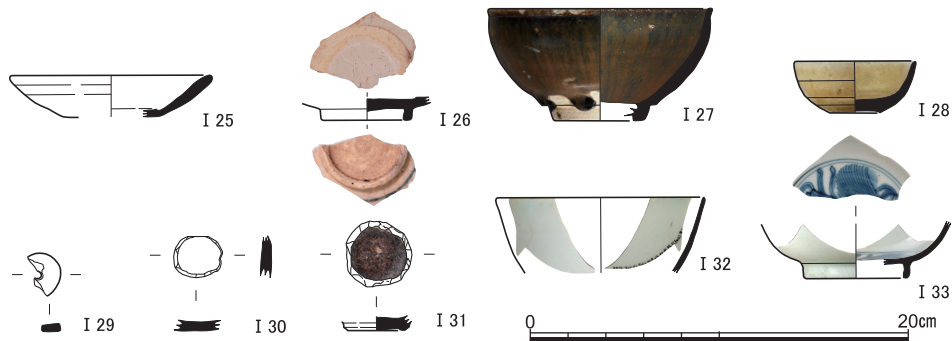


図8 緑灰色細砂質土出土遺物 (I 25土師器, I 26~I 28陶器, I 29~I 31転用品, I 32・I 33磁器)

をもつ土師器など近世の遺物が出土しており、江戸時代前期の17世紀ころのものと考えられる。SK17・SK18などの遺構が検出されたが、遺物はみつかっていない。ここでは、緑灰色細砂質土層からみつかった数点の遺物を紹介する。

緑灰色細砂質土出土遺物 (I 25~I 33) I 25は土師器の皿である。見込みには圏線がはしる。にぶい橙色を呈する。胎土には3mm以下の砂粒が含まれる。I 26は陶器の底部である。胎土は灰白色で、外面には青色の線が一本はしり、それを覆うように、全体に白色の釉がかけられたようだ。見込みに釉剥ぎの部分である蛇の目がみられる。外面の高台より内側にも釉はかけられない。I 27は陶器天目碗である。高台部分以外に鉄釉がかかる。I 28は陶器の小盃である。全面に灰釉がかけられる。I 29・I 30は土師皿を転用した土製の円盤である。I 29の方は、厚さ4mmほどで、中央には円形の孔が空いていたようだ。I 30の方は厚さ6mmほどで、穿孔はない。I 31は陶器の底部を打ち欠いて円盤に転用したもので、もともと内面の見込み部分であった箇所には鉄釉がかかる。I 32・I 33は磁器の碗である。I 32には紋様は残らないが、I 33の見込みには染付による紋様が描かれる。

(3) 近世1期の遺構から出土した遺物

幕末の遺物包含層である灰褐色土Ⅱの下には、西半で黄灰褐色土が、東半で淡褐色土が広がっていた。黄灰褐色土と淡褐色土を埋土とする遺構を、本報告では便宜的に近世1期と呼ぶ。以下に、これらの遺構から出土した遺物を紹介する。

SE1出土遺物 (I 34~I 36) I 34は磁器片である。碗の破片と考えられる。外面に染付による紋様が残る。I 35・I 36は陶器片である。I 35は皿で、見込みに釉剥ぎ部である蛇の目が確認される。I 36は碗の底部と考えられる。

SK4出土遺物 (I 37・I 52) I 37は土師器の鉢である。外面にはわずかに刷毛目

遺物

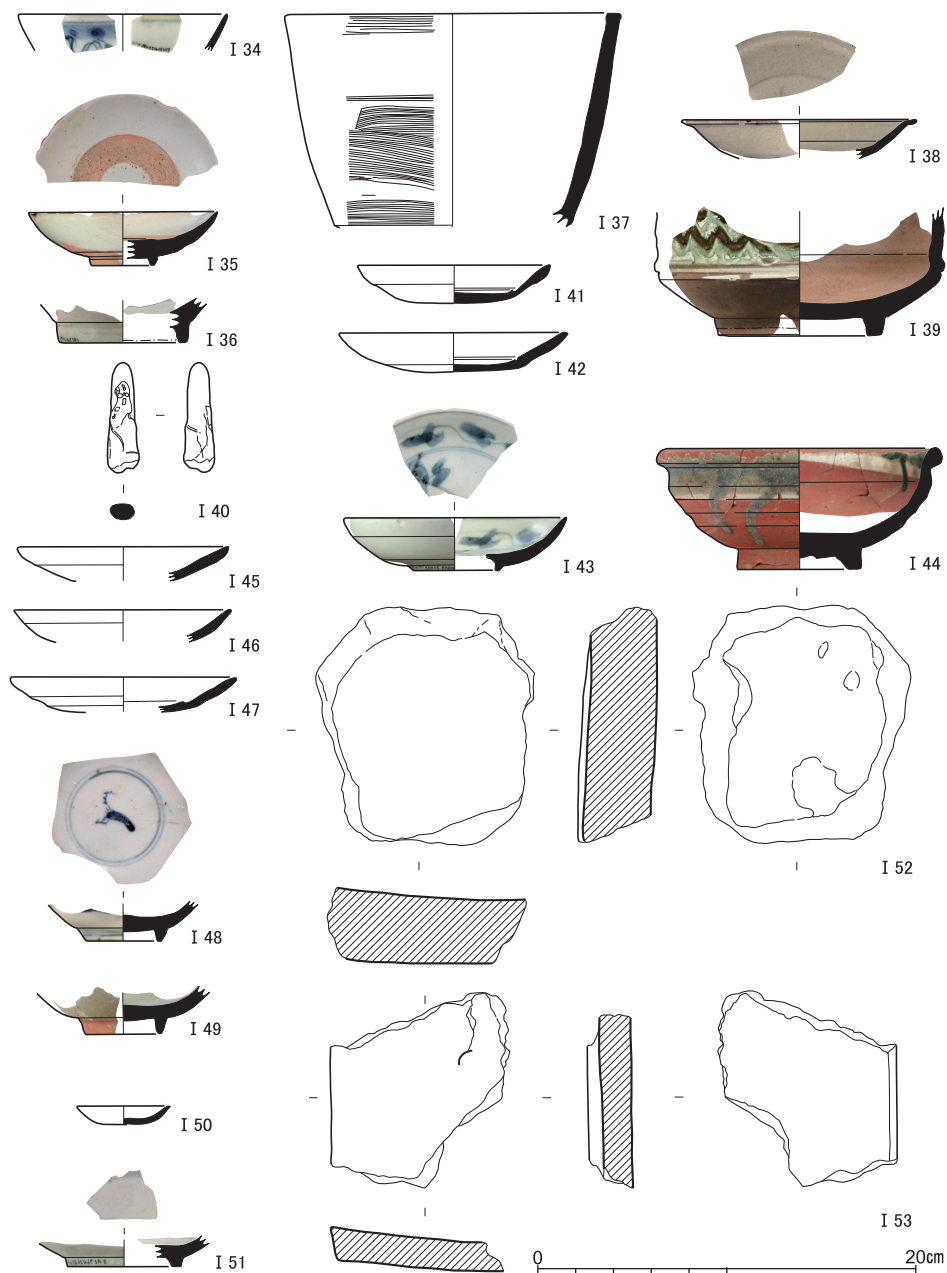


図9 SE 1出土遺物 (I 34磁器, I 35・I 36陶器), SK 4出土遺物 (I 37土師器, I 52瓦), SK 3出土遺物 (I 38・I 39陶器), SK 13出土遺物 (I 40木製品), SP 207出土遺物 (I 41・I 42土師器, I 43磁器, I 44陶器), SX 2出土遺物 (I 45・I 46土師器), SK 5出土遺物 (I 47土師器), SK 6出土遺物 (I 48磁器, I 49陶器, I 53瓦), SK 8出土遺物 (I 50土師器, I 51陶器)

が残る。I 52は井戸瓦である。厚さは36mmある。この井戸瓦が出土したことから、S K 4は井戸であったと考えられる。

S K 3出土遺物 (I 38・I 39) I 38・I 39は陶器片である。I 38は皿で、見込みに圈線がはしる。また、口縁が外反し、端部がわずかにもち上がる。I 39の器種は不明である。外面胴部には白色の釉と緑色の釉がかかり、ジグザグの紋様帯を形成する。

S K 13出土遺物 (I 40) I 40は木製品で、棒状に加工されている。片面には鉄錆がこびりつく。何に用いられたものかは判断できない。

S P 207出土遺物 (I 41～I 44) I 41・I 42は土師器の皿である。いずれも見込みに圈線がはしる。I 41の口縁部の内外面には煤がつく。胎土の色調は、I 41が浅黄橙で、I 42が橙である。I 43は磁器染付の皿である。内面にのみ紋様が描かれる。I 44は陶器の碗である。胎土は赤橙で、口縁部の内外面に白色と緑色の釉がかかる。ただし、釉のつきは悪く、口縁端部では剥がれてしまっている。

S X 2集石内出土遺物 (I 45・I 46) I 45・I 46は土師器の皿である。I 45の口縁には煤がつく。胎土の色調は、I 45が浅黄橙で、I 46がにぶい黄橙である。ほかにも、土師器皿の底部が出土している。見込みに圈線がはしる。

S K 5出土遺物 (I 47) I 47は土師器の皿である。見込みには圈線がはしる。浅黄橙色を呈する。

S K 6出土遺物 (I 48・I 49・I 53) I 48は磁器の底部で、見込みに紋様が描かれる。I 49は陶器の底部である。I 53は瓦である。全面にいぶし銀がかけられる。

S K 8出土遺物 (I 50・I 51) I 50は土師器の小皿である。手づくねで成形されたようだ。I 51は磁器の底部である。

S K 14出土遺物 (I 54～I 63) S K 14は今回の調査で最もまとまって遺物が出土した遺構である。I 54～I 56は土師器の皿である。いずれも見込みに圈線がはしる。色調はI 56のみ淡橙で、ほかは浅黄橙である。どの土師器にも口縁部に煤が付着するため、灯明皿として用いられたと考えられる。I 57～I 59は陶器である。I 57は碗の口縁部である。口縁はわずかに外反する。I 58は皿である。外面はヘラで削られる。口縁がわずかに外反する。見込みには蛇の目状の釉剥ぎがみられる。I 59は陶器の底部だが、器種は不明である。I 60・I 61は磁器である。I 60は猪口で、口縁が外反する。外面の口縁端部の下には、低い凸帯がはしる。底部に染付による紋様がある。I 61は大皿の口縁部である。内面には染付で紋様が描かれ、外面にも一条の線がはしる。I 62は瓦器の火鉢である。口縁部が肥

遺 物

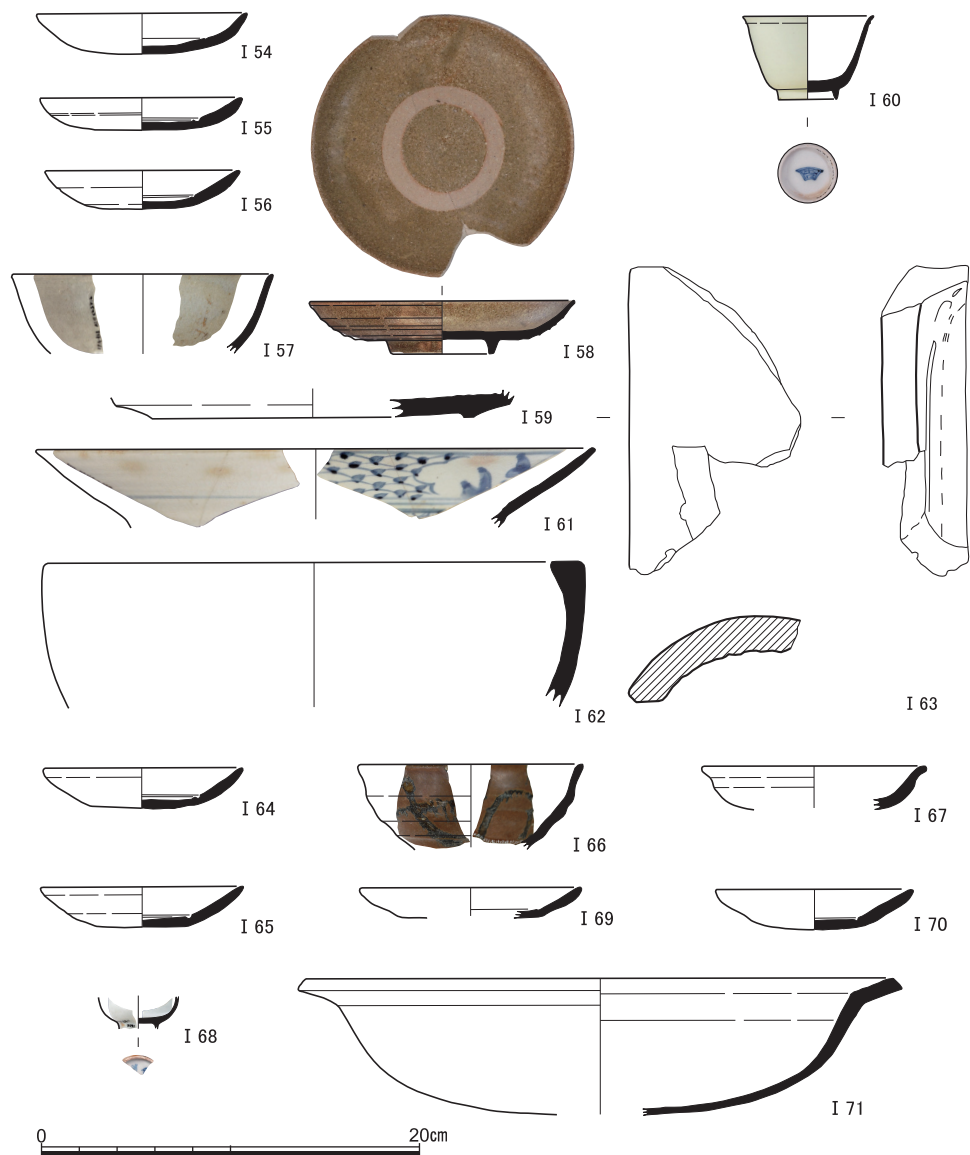


図10 S K14出土遺物（I 54～I 56土師器，I 57～I 59陶器，I 60・I 61磁器，I 62瓦器，I 63瓦），S D180出土遺物（I 64土師器），S D182出土遺物（I 65土師器），S D110出土遺物（I 66陶器），S D103出土遺物（I 67陶器），S P240出土遺物（I 68磁器），S P317出土遺物（I 69土師器），S P500出土遺物（I 70土師器），S P444出土遺物（I 71土師器）

厚し、上面は水平である。I 63は丸瓦である。凸面はケズリ調整がされているが、凹面には布目が残る。ほかにもS K14からは、陶器すり鉢・砥石・包丁・釘・寛永通宝などが出土している。

S D180出土遺物 (I 64) I 64は完形の土師器の皿である。見込みに圈線がはしる。口縁部に煤が付着するので、灯明皿であったと考えられる。浅黄橙色を呈する。

S D182出土遺物 (I 65) I 65は土師器の皿である。見込みに圈線がはしる。にぶい黄橙色を呈する。

S D110出土遺物 (I 66) I 66は陶器の碗の口縁部である。全体に鉄釉がかかる。美濃・瀬戸焼と考えられる。ほかに、備前焼のすり鉢や、砥石が出土した。

S D103出土遺物 (I 67) I 67は陶器の皿である。

S P240出土遺物 (I 68) I 68は磁器染付の猪口である。底部に染付で文字が書かれたようだが、破片であるため判読できない。

S P317出土遺物 (I 69) I 69は土師器の皿である。見込みに圈線がはしる。浅黄橙色を呈する。

S P500出土遺物 (I 70) I 70は土師器の皿である。見込みに圈線がはしる。口縁に煤が付着するので、灯明皿である。色調は浅黄橙である。

S P444出土遺物 (I 71) I 71は土師器の炮烙である。口径は32cmである。口縁端部から内面にかけて撫で調整が施される。外面に調整痕はない。内面には煤が付着する。ものを炒った際に残されたものであろうか。にぶい黄橙色を呈する。

S D122出土遺物 (I 72) I 72は瓦器の火鉢である。破片であり、脚は1点のみ残る。そのため、脚が全体で何点あったかはわからない。脚には内側に向かって直径8mmの穿孔がある。脚は中空になっているようだ。器の内面には、横方向の刷毛目がみられる。一方、外面は磨かれ、光沢がある。口縁は内側に折れ曲がり、上面は水平になる。上面と外面の間は面取りされ、斜面をなす。

S P243出土遺物 (I 73) I 73は陶器のすり鉢である。口縁部の内外面は横撫でによって調整される。内面には、横撫で調整の上で、刻みが入れられる。口縁部外面は釉による光沢がある。

S P403出土遺物 (I 74) I 74は瓦器の火鉢である。底面の直径は74cmあり、大型である。外面のみ磨かれて滑らかである。

遺 物

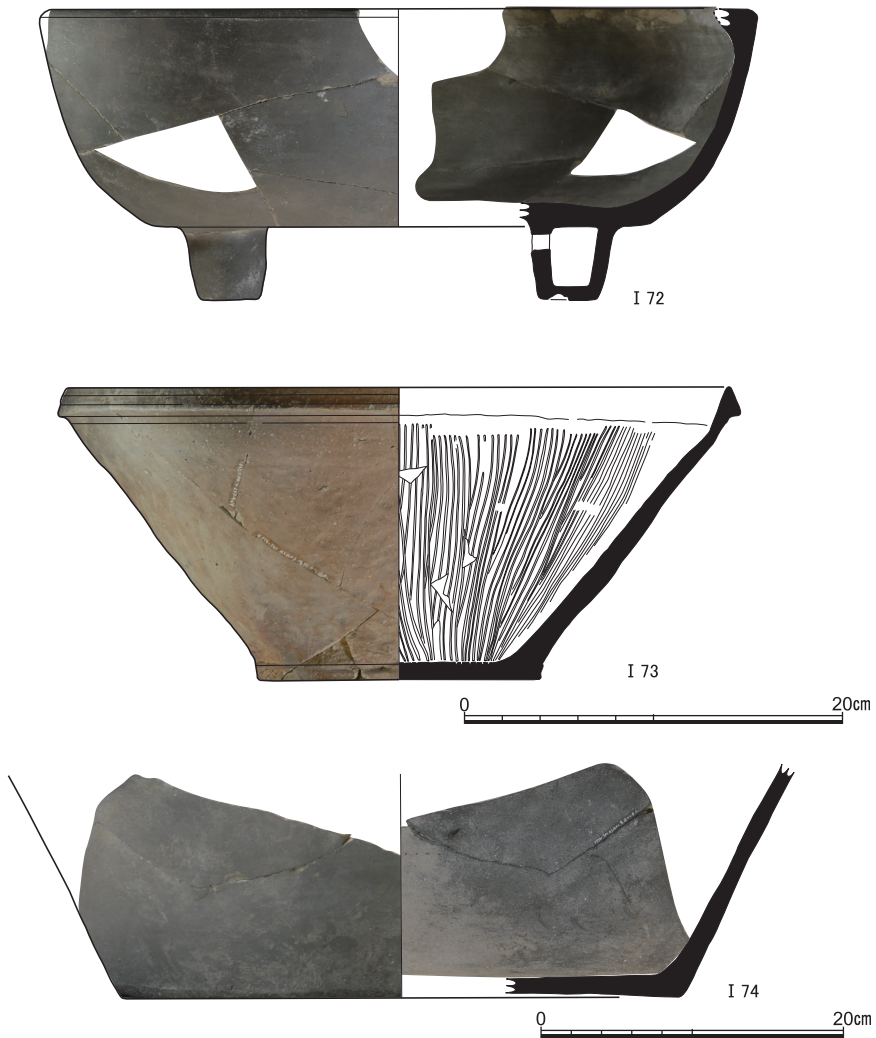


図11 SD122出土遺物（I 72瓦器），SP243出土遺物（I 73陶器），SP403出土遺物（I 74瓦器）
I 72・I 73縮尺1/4，I 74縮尺1/5

(4) 近世2期（幕末）の遺構から出土した遺物

攪乱の下には灰褐色土Ⅱが広がっていた。この灰褐色土Ⅱを埋土とする遺構を，本報告では便宜的に近世2期と呼んでいる。近世2期は，幕末ごろと考えられる。

集石SX1出土遺物（I 75～I 79・I 86） I 75～79は石垣SW1の上面に広がっていた集石SX1からみつかった遺物である。I 75・I 76は陶器である。I 75は皿であり，内面に3本一組の刻みが入る。食材をすりおろすのに使用されたものであろうか。I 76は

口縁部の小片である。I 77～I 79は磁器である。I 77は合子の身であり、蓋を受けるかえりをもつ。I 78は碗の口縁部である。外面に染付による紋様がある。I 79は染付蓋物の身である。外面に染付による紋様が残る。I 86は棧瓦片である。凹面のみ磨かれる。凹面から凸面に向けて、釘孔が空けられる。これら以外に、集石からは砥石もみついている。

石垣SW1出土遺物（I 80～I 82） I 80・I 81は石垣SW1の裏込めから出土した。ともに磁器染付である。I 80は蓋である。外面に染付による紋様がみられる。I 81は皿である。内外面に染付による紋様が確認される。口縁端部は、褐色の釉で縁取りされる。I 82は石垣の下から出土した。陶器の碗の口縁部である。全面に緑色の釉がかかる。SW1からはほかにも磁器の小片が出土した。

SD35出土遺物（I 83～I 85） I 83・I 84は陶器である。I 83は徳利の底部と思われる。I 83以外にも、別の徳利の個体もみついている。I 84はSD35の下層から出土した陶器の皿である。見込みに圏線がはしる。I 85は磁器の碗である。溝の下層から出土した。内外面に染付による紋様がみられる。外面には、「有大人先」の銘が確認される。SD35からはレンガ片の可能性のある小片や、近代磁器と思われる破片もみついている。よって、溝が廃絶されたのは明治時代に入ってからであったかもしれない。

灰褐色土出土遺物（I 87～I 94） I 87は磁器の栓である。つまみの側面に貫通する孔があり、中にはさびた鉄が残る。I 88は土師器の紡錘車である。直径は48mm、厚みは7mmである。上面は花卉の形をなす。中心に孔が穿たれ、その孔から上面にかけて、さびた鉄がこびりつく。I 89は陶器の蓋である。I 90は輪状の陶器である。半分が残り、直径54mm、厚さは9mmである。上面に「一々」の墨書が残る。I 91は磁器の人形である。尖った帽子を被り、右手の下には大きな袋を置くようだ。七福神のいずれかをかたどったものと考えられる。表面の一部に緑釉がかかる。底面には直径2mmの小孔が穿たれる。I 92は磁器の紅皿である。貝殻を模したものである。口縁の直径は24mmで、高さは10mm。口縁は分厚い。I 93・I 94は磁器のパレットである。I 93は32mm×20mm×7mm、I 94は35mm×20mm×7mmと、I 94の方がわずかに大きい。いずれも裏面には刻印があり、製造者にかかわると考えられる。I 93の裏面には四弁の花の紋様と「藍彩□堂」銘が、I 94の裏面には「□生堂」銘が刻印される。I 93と同じサイズで、同じ刻印をもつものがもう1点みついている。

(5) 近代の遺物

表土・攪乱を機械で掘削している最中に、近代の遺物が出土した。今回の調査区は、明

遺 物

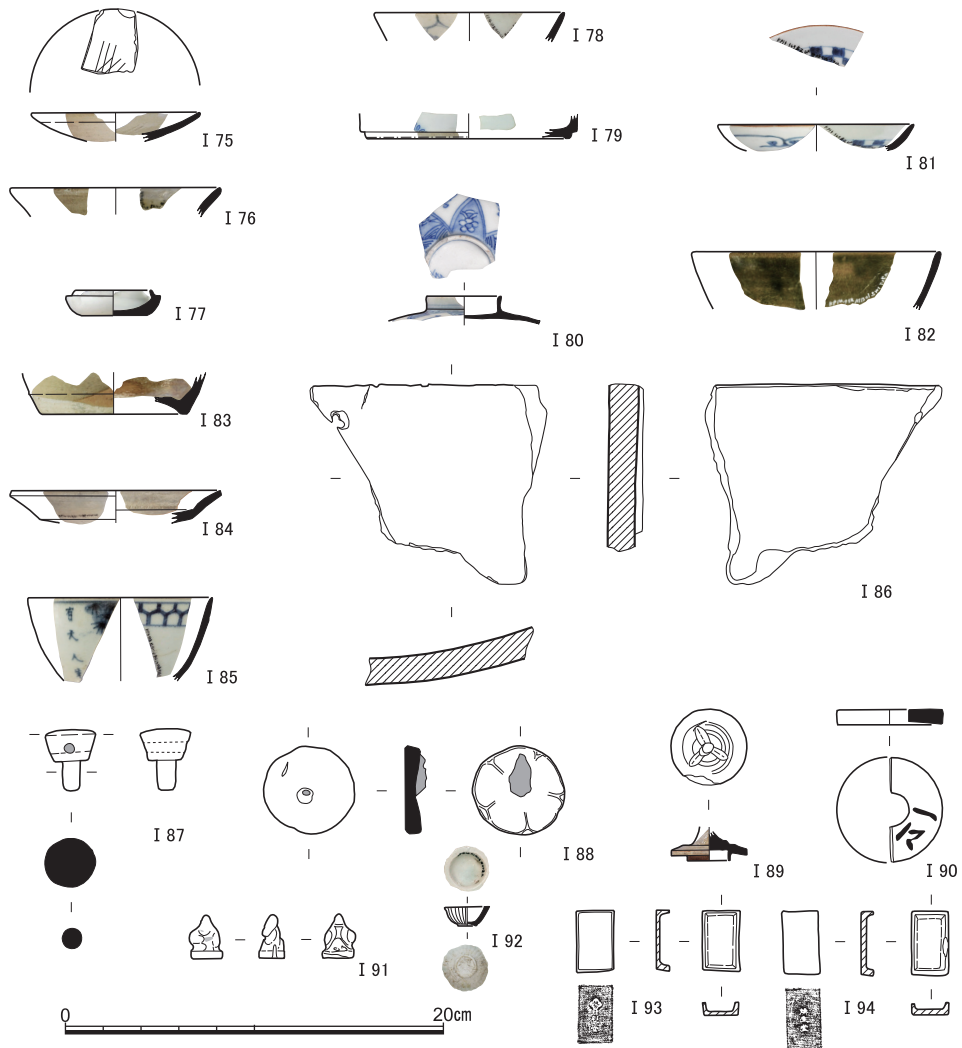


図12 SX1出土遺物（I 75・I 76陶器，I 77～I 79磁器，I 86瓦），SW1出土遺物（I 80・I 81磁器，I 82陶器），SD35出土遺物（I 83・I 84陶器，I 85磁器），灰褐色土出土遺物（I 87磁器，I 88土師器，I 89・I 90陶器，I 91～I 94磁器）

治20年（1887）に建てられた京都織物会社の本社工場の敷地の東南部にあたる〔京都織物株式会社1937 pp.87-92〕。今回の調査では、織物会社にかかわる遺物も出土した。

表土・攪乱出土遺物（I 95～I 108） I 95・I 96は磁器の碗蓋である。外面に染付で紋様が描かれる。I 95の外面には枝葉の表現がみられ，I 96の外面には鯛と恵比須の絵が描かれる。I 95のつまみ内には「□□堂製」の銘がみられる。I 97・I 98は湯飲みであ

る。I 97の高台内には、方形区画の中に「丸井」の銘が書かれる。I 98の外表面口縁部下には、金字で文字が右から左に向かって書かれるが、解読できない。「□合總會純□□支援□芽一回」と書かれ、「回」の後には円枠の中に「援」の字が書かれる。円枠の上方には2枚の花弁様のものがつき、下方には3点の小さな突起がつく。また、「援」字の対面には、梅鉢紋が書かれる。I 99～I 102は磁器の椀である。見込みには、織物をする際に使う静輪を2つ十字形に並べたような紋様が描かれる。京都織物会社の商標と考えられる。I 99～I 101の底部の高台内には、扇子の絵とともに「TRADE MARK」の銘がみられる。いずれも同じ絵と銘をもつが、細部は異なり、同じスタンプを用いたものではない。I 103は磁器の静輪である。I 104は陶器の湯飲みである。外面には、鉄釉で右から左に向かって「京都織物會社」と書かれる。I 105・I 106は洋食器の破片である。I 105は大皿で、内面に草花が描かれる。破片であるI 106の外表面底部に、断片的な銘である「BROS」「AND」「PRIL 15TH 1902」の文字が確認される。2013年度の吉田南構内で出土した洋食器の中には、「JOHNSON BROS ENGLAND」の釉印が付されたものがある〔伊藤ほか2016 p.103〕。今回みつかった食器も1883年にイギリスで創業した同社の製品であろう。1902年4月15日に製作されたものと考えられる。I 107は陶器のボトルである。ほぼ完形で残る。外面下方に2箇所、刻印があるが、明確でない。「42」の数字とその下に文字で円をかたどった刻印は、商標にかかわるものであろう。また、「28」「XRdf」「V」などの文字の入る不定形の刻印は、商品番号を表したものであろうか。I 108は完形品の陶器徳利である。器高26.2cm、底直径9.0cm、胴腹直径14.4cmで、いわゆる貧乏徳利である。外面の三方に白釉で、「金常高□」や「□□馬場」と草書体で書かれる。丹波産と考えられる。

5 小 結

今回の発掘調査は、周辺におけるこれまでの調査成果に整合的で、近世吉田村の西南部に位置するこの一帯が、中世までは鴨川が流れていて、17世紀のうちには安定して農地化が進んだことを確認できた。しかし、中世末期から近世初頭にかけての離水状況は、やや複雑で、本調査区西北辺や、本調査区の南西150mの349地点〔千葉・富井2011〕の西辺および北東50mの366地点〔網・東2013〕では、近世遺構の基盤となる砂礫層の最上部には17世紀の遺物が認められるのに対し、本調査区北辺中央から西南部にかけては、中世末期にさかのぼると判断できる北東－南西の走向の人工的な鋤溝のような平行溝群がはしり、同様の時期には、本調査区の南70mの384地点〔伊藤2014〕では、北北東－南南西の

小 結



図13 近代の遺物（I 95～I 103・I 105・I 106磁器，I 104・I 107・I 108陶器）

走向の急斜面沿いに、集石や溝・道がある。

本調査区北辺中央で検出した中世末期と思われる平行溝群は、埋土も被覆する上位の層も水成堆積でないで、近世初期に大きな氾濫がおよんだとは考えがたい。そして、その基盤となる砂礫層の上半は、粗砂基質の砂礫層でシートフロー状の粗砂の堆積も認められるなど、氾濫原だったことがわかる。また384地点では、16世紀ごろまではシルト層や砂礫層が幾層も堆積しながら南流していた幅2 m以上の流路が確認されている。

こうしたことから、中世後半ごろには、鴨川（ないし高野川）は本調査区の西側に河道を移していき、本調査区周辺は16世紀までには氾濫原となり、人が開拓を試みるが、それでも、17世紀に入っても時に増水に見舞われていたと思われる。しかし、本調査区の西南西100mの379地点〔千葉・長尾2014〕と398地点〔千葉・長尾2015〕で検出された、南方の聖護院村との境界をなす道路の敷設された17世紀前半、ないしはその道にともなう水路の開削された17世紀後半には、本調査区周辺はおよそ安定した農地となった。

幕末からの本調査区の土地の所有や利用は、文久4年（1864）に京都守護職による練兵場、慶応4年（1868）に官軍による操練場、明治5年（1872）に京都府による牧畜場、明治20年（1887）に京都織物工場、と様変わりしていくが、近世2期とした灰褐色土Ⅱを埋土とする19世紀後半までの遺構群は、レンガを含まないので牧畜場の時代までのものだろう。その中で、石垣SW1とそれにおよそ直角につながる柱穴列SA3は、2.8m前後の単位でそれぞれ構成されていることから、同時に機能していたと思われるが、農耕にともなうと思われる杭列や鋤溝とは軸を異にするので、これらが文久4年以後の練兵場にかかわる遺構の可能性はある。石垣に並行する区画溝SD35は、最終的には灰褐色土Ⅰから掘り込まれているのでそれにとともなう杭列とともに、石垣敷設後にも掘削されたことになる。したがって、牧畜場にとともなう遺構と考えておきたい。

本章は、第4節を内記が執筆し、その他の執筆と全体調整を富井が担った。発掘調査と整理作業は富井と内記が担当し、長尾玲が補佐した。測量や出土資料の整理などでは、河野葵、西田陽子、柰佐和子、鈴木はるか、河合謙一郎の助力をえた。